

祭りを復活させた男

「みんなが喜ぶ姿にほっとした」

駅前通りを抜け、「本陣跡地前」の交差点に来ると、右手に三井住友信託銀行が見える。宿場時代は問屋場といやばが置かれていたその場所に、昔、渡勝商店が店を構えていた。渡勝家が道路用地に土地を提供したおかげで、交通の便ができたあがったともいえる。そんな杉戸の有力者である渡邊嘉一氏は、「夏まつり」を復活させた人物だ。祭り復活のいきさつと思いを聞いた。



渡邊 嘉一（わたなべ・よしかず）さん

昭和7年生まれ。29歳で「渡勝商店」を四代目として引き継ぐ。現在は「株式会社 渡勝」代表取締役。問屋場（といやば）跡の裏手にある「伊奈稻荷神社」は、渡勝商店時代から夫妻で手入れ・管理を続けている。

祭りを
つくる
男たち
①

「小

さいころ、子ども神輿を担いだことがあるよ。あのころは毎年

祭りが待ち遠しかったね」

幼少期の記憶に、夏まつりの賑わいと、楽しかった“という感覚が染み込んでいる。渡勝商店四代目の渡邊嘉一さんに祭りの思い出をたずねると、開口一番、力のこもった声が返ってきた。楽しみだったのは、神輿だけではない。

「露店で食べ物を買えるのがうれしくてね。親戚のおばさんなんか訪ねてくると、十銭とか、五十銭とか、小遣いをくれるでしょ。それを貯めて、祭りの日に使うのが

楽しみだった。今のようにならなくても食べられたわけじゃないからねえ」

少年時代の渡邊さんが楽しみにしていた夏まつりは、その後、戦争による物資不足で一度杉戸の町から姿を消す。再び祭りの話を聞いたのは、昭和45年の春。渡邊さんが39歳のときだった。商工会長より、当時商工会青年部の部長を務めていた渡邊さんに声がかかった。「杉戸の本神輿は伝統がある。ぜひ復活させて、町を活性化させてほしい」。実はこのとき、渡邊さんは亡き父親から継いだ店の経営で大変な時期だった。けれど、祭りと聞いて子どもころの楽しい記憶

がよみがえった。またあの賑わいを取り戻せるならー。「じゃあ、やってみようか」。渡邊さんは、わずかな寄付金と青年部の予算を寄せ集めて動き出した。神輿を借り受け、担ぎ手を集め、まずは翌年7月に本神輿が一基のみの「みこし渡御」として祭りを復活させたのだった。

「祭りの復活は、私だけの力じゃない。たくさんの方が動いてくれた。再開したときは喜んだよ。でも何より、みんなが喜んでる姿を見て、私はほっとしたんだね」
夏の賑わいを取り戻した町に、今年も祭りがやってくる。



上：渡勝商店の店先／下：昭和初期の杉戸の渡御
(写真提供：高橋写真館)